

「そのとき、平成23年3月11日」

灘診療所非常勤、釜石のぞみ病院常勤医師、ちば内科診療所 院長 千葉 誠

三陸鉄道南リアス線釜石駅で下車して、甲子川にかかる橋の上から白鳥、鴨の親子の成長ぶりを眺め釜石のぞみ病院に通勤するのが日課でした。しかし、いるはずの水鳥たちの姿はすでになく、平成23年3月11日午後2時46分、東日本大震災は起きました。平成三陸大地震津波と呼ぶ方が後世にわかりやすいのではないだろうかと思っています。

たくさんの尊い命が一瞬で奪われてしまいました、亡くなられた方々にご冥福をお祈りいたします。同時に被災された方々には心から深くお見舞い申し上げます。

3月11日午後、私は週末を神戸で過ごすため、いわて花巻空港から飛行機に乗りました。離陸後約15分、地震の第一報は機長からの機内アナウンスによるものでした。宮城県沖の大地震により伊丹空港への着陸が少し遅れるといった内容でした。その2日前にも震度4の地震があり、その余震であり心配はないだろうと高をくくっていました。

伊丹空港の大画面テレビには、大津波警報、6メートルの津波が予想されると出ていました。大船渡町内の商店街にはチリ地震津波の到達地点水深4メートルの表示が掲げられています。それを小さい頃から何度も目にしていたので、とっさに50年前のチリ地震津波以上の経験したことのない津波が来るのではないかと不安がよぎりました。電車の中から妻に電話し、子供を塾に行かせるな、津波が来るぞと叫んでいました、しかし、電車の中の人々はそれを聞いて怪訝そうな顔をしているように感じられました。自分だけ大船渡にいる錯覚に陥っていました。これは地震が起きてから40-50分間の私の動揺であり、仙台上空からヘリで撮られた第1報映像が茶の間にまだ届いていません。

自宅に帰るや否やテレビから飛び込んできた映像は宮城県名取市上空でしょうか、津波がまさに民家を押し流しながら内陸へ広がり突き進んでいるライブ中継でした。以後の被災地の様子はご存じのとおり、何度も映像を通して確認できるものばかりです。

さて、地震が起きてから津波が押し寄せるまで一体何をすべきだったのか、何ができたのだろうか。今回の三陸大津波では30分から40分後に津波が襲来しています。北海道奥尻島では地震後5分で津波に襲われたと聞きます。するべきことはただひとつ、高台に一目散で逃げろ、これしかありません。振り返るな、引き返すな、とにかく自分の身は自分で守れ、であります。津波に関して言えばとにかく高いところに逃げれば少なくとも命は助かります。小さい頃から身にしみついていた条件反射、地震イコール津波が来る、これが遠く関西にいてもわが身で反応していました。阪神大震災を経験した妻でも結婚当初はどうしてこの夫は地震が起こるたびに津波情報をいつまでも気にするのだろうと思っていたようです。われわれ岩手県沿岸出身の人間が恐れるのは地震よりも津波だったからです。すべてを置いて逃げるしか生き延びる方法は無いのです。

それでは医師としてその時間に何ができたのか、被災地にいなかった私は結局何もできません、全く無力でした。テレビの映像を茫然とみているしかありませんでした。現地への連絡網が全て遮断されていました。

その時、何ができた……、何もできず、悔やまれます。

被災地では情報網の完全なる遮断により全く周囲の状況をつかむことができななかったと言われていました。普段手にしている携帯電話も何の役にもたちません。かろうじて電灯代わりにはなったでしょうがバッテリーが無くなればそれまでです。ライフラインが止まっています。その日の朝はマイナス4℃だったのを覚えています。

神戸からどうやって岩手にたどりつけばいいのだろうか途方にくれていました。釜石の勤務先の状況、

大船渡の診療所のこと、両親、兄弟、親類の安否が気がかりでした。現地との連絡は全く取れません。ヘリコプターから入ってくるテレビを通じての情報だけでした。

兵庫県からのご厚意により花巻空港まで陸路でたどりつくことができ大変感謝しております。車を手配し大船渡にようやくたどり着けたのはすでに震災から5日目の朝でした。自分の診療所を確認したのはその後さらに3-4日後です。発災時からあきらめがついていましたのでその惨状は予想できました。屋根まで津波をかぶった建物は土台から浮いてしまい、壊れた壁から院内を覗いてみるとそれはもう巨大な洗濯機でかきまわされたような惨劇でした。

現地に入ってから医療活動について

まわりの惨状を目にしながら県立大船渡病院まで行き医療支援を申し出てそこで医療活動を開始しました。自ら動いて情報を取りにいくしか方法はありませんでした。当時、県医師会の被災地医師リスト上わたしは行方不明者リストに上げられていたようです。連絡がとれないのでどうしようもありませんでした。夜は避難所を訪れ健康相談や診察をしておりました。幸い実家は無事でしたので寝床はありましたが何か避難所の方々に申し訳ないような思いでした。8日目ようやく釜石までの道路が確保され釜石のぞみ病院にたどり着きました。ライフラインが止まった状態で150名の入院患者を維持していくことは不可能なため、内陸の病院への患者移送の準備がすでに自衛隊の協力の下で始まっていました。

ろっこう医療生協会員の皆様、スタッフの皆様の支援に対し心より厚く感謝を申し上げます。